

## 教室における児童の座席指向に関する研究

専攻 人間発達教育専攻  
コース 幼年教育コース  
学籍番号 M11024E  
氏名 長野 弘和

### 問題・目的

人間のコミュニケーション方法の一つとして、言語を用いない非言語行動が挙げられる。「座席行動」は非言語行動の一領域であり、北川(2012)は「一定の間隔と方向性をもって配置されたいくつかの座席の中から1つを選択し着席する、という比較的構造化された環境下での限定的な空間行動」としている。着席者の心理状態が着席位置等に表れる場合があることも報告されており、近年様々な分野で座席行動に関する研究が進められている。

教育分野においては、大学の講義室をフィールドとした研究が多い。北川(1978)や田中(1997)は、学生の座席選択の変動を追跡した。結果、学生の着席位置はある領域に安定的に固定されており、変動が少ないことが明らかになった。國吉(2004)や遠山(2008)は、後列よりも前列の座席に着席する学生の方が、講義へのコミットメントが有意に高く、成績も良いことを示した。前列を選択した理由としては「教師の話が聞き取りやすい」、後列を選択した理由としては「何となく」「授業を受けたくない」等が挙げられており、学習に対する意欲や積極性が座席選択に明確に反映されていた。また、北川(1991)は、実際の学生の着席位置とアンケート調査から、教室が心理的に5区域(前部・後部・中央部・左右の側部)に区分される構造を持つ空間であることを明らかにした。

ここで、小学校の児童を対象とした先行研究を2つ挙げる。宮本ら(1994)は、4年生と6年生の児童に仮想の座席配置図を提示し、各座席に対して座りたい気持ちの程度を5段階で評価させた。結果、児童の座席選好のパターンは多様であり、学習意欲や性格等の個人の特性の違いが大きく影響している可能性が示唆された。また、4年生が前方を、6年生が後方を好む傾向が見られ、学年(発達段階)による座席選好の相違が存在すること、学年に関わらず最後行の座席はより嫌われる傾向があることが明らかになった。小西(1998)は、1年生から6年生の児童に、各クラスの実際の座席配置図を提示し、「今座っている席」、「今度座ってみたい席(選択)」、「絶対に座りたくない席(拒否)」を記入させ、4年生以上には理由の記述も求めた。結果、2~6年生においては、全般的に前方の座席が選択され、後方の座席が拒否される傾向が有意に示されたが、学年における座席指向の違いは見られなかった。また、座席選択及び拒否の理由については、「黒板の見えやすさ」という物理的要因を挙げる者が多く、「先生のそばがいい」「みんなから離れて寂しい」という対人的要因を挙げる者は少数であった。

このように、大学生を対象とした研究に対し、児童を対象とした研究は少数である上、見解も一致していないのが現状であり問題点である。しかしながら、両者に共通する結果が示さ

れている部分もあり、更なる改善の余地があると思われる。そこで、本研究では「より一般的な児童の座席指向の把握」「座席指向に関する要因の分析」「児童の特性と座席指向の関係性の把握」の三点を目的とし、児童の座席指向に関する検討を行う。

#### 方法

大阪市と堺市の公立小学校 3 校の 3 年生以上の児童を対象とし、座席指向に関する無記名のアンケート調査を行った。

#### 調査内容

仮定の 32 人学級の座席配置図を提示し、各座席に対する座りたい気持ちの強さを 4 段階で記入してもらった。同時に、「一番座りたい席」及び「一番座りたくない席」の選択と、その理由記述も求めた。さらに、「男の子の隣の席」等、座席の特徴に対する評価 6 項目、「黒板が見えやすい」等、現在の座席に対する評価 6 項目、「学校に来るのが楽しみだ」等、児童の特性に関する質問 11 項目の、合計 23 項目について 4 件法で回答を求めた。

#### 分析対象

回答者 1394 名の内、理由記述の部分を除く全ての項目に不備なく回答した 1118 名分を有効回答、分析対象とした。全体の有効回答率は 80.2%であった。

#### 結果及び考察

学年が上がるにつれて前方が忌避され、後方が選好される傾向等が有意に表れており、学年による児童の座席指向の違いを報告していた宮本ら（1994）の説を支持する結果となった。本研究では、学年差に加えて男女差が存在すること、学年による座席得点の推移の様子にも男女差が見られることが明らかになった。各区域において、6 年生になると座席得点の男女差が見ら

れなくなることも、特筆すべき点であると思われる。また、座席得点から、教室の中央付近は学年や性別に関わらず嫌われにくい場所であること、前方両端の座席が全体的に忌避されることが新たに明らかになった。また、後方両端と教卓前の座席は、選好率、忌避率共に高い値をとる場合があり、児童の好みが分かれる座席であると言える。

選好理由、忌避理由共に、「黒板の見えやすさ」を中心とした「授業関連」のカテゴリーに対する反応率が顕著であり、小西（1998）と同様の結果となった。本研究では、選好理由の「快適性」や忌避理由の「先生との関係」が、学年と共に反応率が上昇する傾向が新たに明らかとなり、興味深い結果となった。

「視力」と前後方向の座席位置に強い相関が見られ、視力が悪い児童が前方を好む傾向が顕著に表れていた。また、4 年生以上では、「授業や勉強に対する感情」と前後方向の座席位置の相関を確認することができたが、大学生ほど顕著な傾向は見られなかったため、勉強と座席指向の相関が強まるのは中学生・高校生の段階であると推察できる。なお、今回の調査では、「社交性」「発表に関する感情」「身長」と座席指向の関係性を見出すことはできなかった。

本研究により、児童にとって座席が重要な意味を持つものであることが確認できた。教師が児童の座席指向を把握しておくことが、適切な教育環境の構築につながり、より円滑な学級経営が可能になると思われる。

本研究が、児童のより良い学校生活の一助となれば幸いである。

主任指導教員 横川 和章 教授  
指導教員 横川 和章 教授